

C 特別教育活動に関する研究

I 校外行事の運営と問題点（その1）

— 修学旅行・研究旅行の運営とその問題点 —

天野 菊三郎 加藤 剛 北田 明子
高橋 恵亮 原田 秀雄

はじめに

校外行事は、学校という環境を離れて直接社会と接する中で、体験を通して多様な学習を可能にする場である。しかし反面、脱日常の気楽さのために日頃の集団のルールが無視されたり、開放感から事故を招きやすいなど多くの問題点がある。いわゆる修学旅行もこのような行事の1つであり、教科の枠を超えた総合的な学習の場として認められながらも、不用論が起ってくる。即ち、「経済的に余裕があり、個人的にかなり自由に旅行できる。交通の発達や豊富な情報などにより知識も豊かであり、生活圏が拡大している。旅行地の多くはレジャー産業が進出して観光化・商業化されている。交通事情が悪化している中で大集団が移動するのは望ましくない。旅行の総合的な効果に比して、

教師の精神的・肉体的負担が大である。」等の理由があげられる。

従って、このような議論にも拘らず旅行行事を積極的に実施するとすれば、教師の側に実施の明確な意図と期待する効果がなくてはならない。旅行行事を運営するに当たっては、どのような意図で、どんな内容・性格の旅行にするのか、そして、より効果的に意図を実現するために、どこまで生徒に意欲的にとり組ませることができるかの2点が重要な問題点となる。

ここでは、本校における修学旅行・研究旅行の実態を報告する中でこれらの問題について考え、より望ましい旅行の在り方を求めていく手がかりとしたい。

(※注 具体的な実施計画の作成や実施に際しての生徒指導の諸問題は本誌「生徒指導の諸問題」米山氏参照)

I 高等学校研究旅行

1. 年度別旅行行事一覧表

表 1.

年度	修学旅行				研究旅行			
	学年	時期	日数	旅行地	学年	時期	日数	旅行地
36	3	4月中旬	5泊6日	北九州方面	2	10月初旬	1泊2日	長谷・室生 飛鳥・斑鳩・西の京
37	〃	〃	〃	山陽・山陰方面	〃	〃	〃	〃
38	2-3	春休み	〃	〃	〃	〃	〃	〃
39	〃	〃	〃	〃	〃	10月上旬	〃	飛鳥・斑鳩 西の京・奈良方面
40	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
41	〃	〃	〃	〃	〃	9~10月初	2泊3日	吉野地方を加える
42	3	4月中旬	4泊5日	〃	〃	〃	〃	〃
43	3	〃	〃	〃				
	2	10月上旬	〃	高野山・吉野 飛鳥・奈良方面				

44	2	10月上旬	3泊4日	高野山・吉野 飛鳥・奈良方面				
45	"	"	"	吉野・飛鳥 奈良・生駒方面				
46	"	"	"	京都・奈良 吉野・飛鳥方面				
47					2	6月上旬	3泊4日	京都・山陽・瀬戸内方面
48					"	"	"	京都(2泊) 山陽・瀬戸内方面

2. 48年度実施の概略

表 2.

学年	2年生 3学級 (134人)		
時期	48年6月6日～6月9日 (3泊4日)		
行先	京都 倉敷 大久野島		
日程	第1日目 〓 京都 (研究活動) 2 〓 京都 (") 3 〓 岡山 — 倉敷 (美術館) — 尾道 — 大久野島 4 〓 大久野島 (自由行動) — 帰名		
費用	約 15,000円		
研	都市構造と都市計画 — 名古屋市と比較して —		
	内 容 ◦ 京都市の都市構造を路面電車の経路にそって調べる ◦ 京都市の公園について調べる ◦ 京都市内の4地点 (円町・鳥丸車庫前・祇園・九条車庫前) で町並みを調べる		
究	計	行	第1日 11:00 旅館 (10分) — 11:10 <京都駅前> (15分) — 11:25 <河原町二条> — 11:30 市役所 — 14:00 14:05 <寺町御池> (15分) — 14:20 <二条駅前> (15分) — 14:35 市交通局 — <壬生> (40分) — 15:35 16:15 <京都駅前> (10分) — 16:25 旅館
			第2日 8:30 旅館 (10分) — 8:40 <京都駅前> (40分) — 9:20 円町 (30分) — 10:00 — 10:30 鳥丸車庫前 (20分) — 11:10 11:30 <百万遍> (40分) — 12:10 銀閣寺(昼食) (10分) — 13:10 <銀閣寺道> (15分) — 13:00 13:30 <熊野神社前> (15分) — 13:50 祇園 (30分) — 15:00 九条車庫前 (40分) — 16:20 <七条鳥丸> — 15:40 (10分) 16:30 旅館
例 〓 徒歩 〓 バス 〓 路面電車 <> 停留所			

3. 旅行の性格に関する問題点

(1) 研究と観光

年々修学旅行が本来の意義を見失う傾向にあり、限られた時間にベルトコンベア式に見学地をまわる、いわゆる観光旅行化しつつある。コースの選択も旅行業者に主導権を渡した格好で、生徒は何の印象ももたずただ数日間遊んできたと受け取るのでは修学旅行本来の目的に反しよう。本校では47年度から「研究旅行」と呼称を改め、大和旅行以来の研究的性格をより明確にしようとした。しかし、生徒の実態が、「楽しい思い出」として修学旅行を望む中で、^(※) 研究的要素をどのように加えて成果をあげるかが問題であった。

(※) 本校紀要 Vol. 18, p. 39 鈴木孝「学校行事における修学旅行のあり方」参照)

48年度は、前年の反省の上に(前掲書p.45~46)京都で2日間のグループ研究と、大久野島での1日自由行動という計画がなされたが、これは、「研究+レジャー」を実質的に得た一方法であった。しかし、6月11日に実施のアンケートの結果には、「たった2日間の研究では結局中途半端だ、全部自由か全部研究かどちらかにしてほしい、わざわざ大久野島まで行くことはない」などの意見もあり、図1. 2. に示されるように、研究派、観光派とも満足な状態ではない。図1にみられる旅行直後の感想に比して、図2では否定的な感想が男子で多いのは何を意味していると考えられるだろうか。

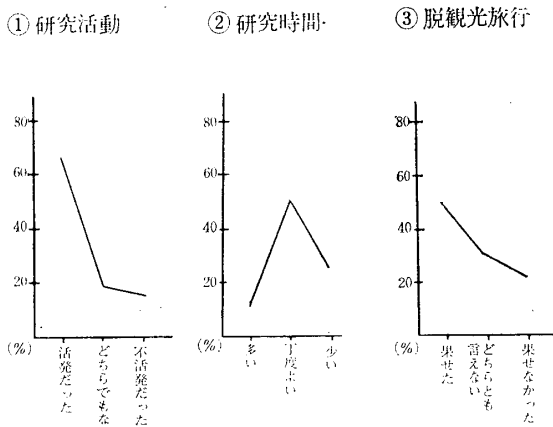


図1. 旅行委員会によるアンケート結果 (6月実施)

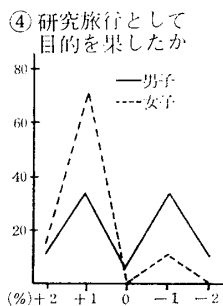


図2. 教員によるアンケート結果(11月実施)

(2) 拠点方式

本年度、はじめて京都で2日間を費す拠点方式を取り入れ、時間的に比較的余裕をもって研究にとり組めるようにした。旅行に研究的性格をもたせるよう意図するなら、従来のような一点通過方式に較べて有効であろう。しかし、全行程が4日足らずの中で、どれ程効果をあげるか。学校でやるのではなく、「広いフィールドにでての研究」を目的とする以上、旅行的要素も必要であり、さらに、現在のように二面的性格としていく限り、拠点方式を徹底していく事には無理が生じよう。本校で高1を対象に行なっている林間学校は、その意味では拠点方式の旅行行事でもある。生徒の受け止め方は、図1の①②から、肯定的であるが、時間的に少ないとするものが25%とかなり高く、さらに充実を望む声もある反面、「たった2日間では…」の否定意見にもなっている。

(3) 小集団行動

旅行の性格を研究主体とすれば、足を止める暇もなく押し流されてゆくいわゆる「団体割引」の方式は適切でない。小グループ単位の行動は、グループ内の人間関係が円滑であれば生徒にとって自由で楽しめるものであると共に、研究課題をもっている場合には活動しやすく、行動範囲も広がり効果的である。しかし反面、掌握が困難で教師の負担は大きい。本年度の場合は、事前の行動計画表と、1日1回の電話連絡を義務づけたが、直接掌握できないことへの不安は、特に生活指導の面から大きい。生徒は当然のことながら、この方式を歓迎し、小人数で活動しやすく自由であったという理由のもとに、図3のように楽しんでいる。

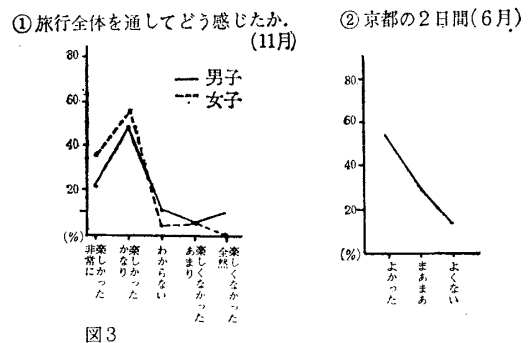


図3

この場合、成功・不成功の最大のカギは、グループ内の人間関係にあるので指導面での問題が多い。(図4)

① グループ研究のテーマの決め方は適切だったか ② グループ編成の方法は適切だったか

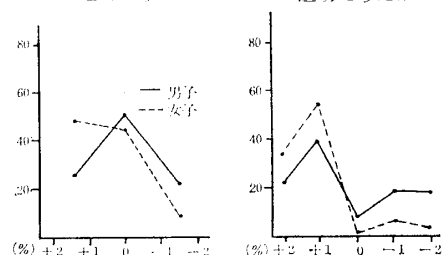


図4

4. 学校の方針と生徒の要望の問題

学校行事として、修学旅行という特殊な団体旅行を行なうとすれば、そこに多様な意義を認めるからである。学校という枠を離れて解放感を味わい、未知の土地で自然や文化に接して素直に感動し、さらに興味をもって探究する機会ともなる。数日の生活を共にする中で、より深い人間関係を得、あるいは集団行動を通して規律を養う。しかし、どのような意義づけも生徒各自が目的をもって、自主的・積極的に行動しない限り無意味である。この意味で、旅行の計画・立案に生徒の意見や要望を反映させることが問題となる。学校の意図した方針に沿って、どのようにしてどの程度まで反映させうるのか。ここでは、過去10年間の変遷のうちに、本年度研究旅行を実施するに至る経過を追う中で、この問題について考えたい。

(1) 修学旅行から大和地方研究旅行へ

第1回の大巾な変革は、昭和43年度に行なわれた。従来続いてきた高3での修学旅行(山陽・山陰方面)を廃止し、高2で行なっていた大和地方を主とする研究旅行を充実させて修学旅行とする変革であった。主な理由は、43年度、林間学荘建設、第1回林間学校の開設を背景にした、行事を縮少の方向で整理するという針のもとに①高3での修学旅行は時期的に不適。②従来の修学旅行が観光化されてきて、意義に疑問を感じる。③大和地方を主とする研究旅行は、年々充実してきて成果が期待できる。というものであった。この決定は基本的には生徒に受け入れられたが、具体的な実施計画の段階で、生徒の強い要望により日数が予定よりふえて4泊5日となった。(表1)

(2) 大和旅行から京都・瀬戸内研究旅行へ

第2回目の変革は47年度、コースの大巾変更と呼称の変更—「修学旅行」を「研究旅行」とする—が行なわれた。その経過の詳細は本校紀要17~18集「学校行事における修学旅行のあり方(I)(II)」にあるが、概略をみていく。46年度の修学旅行が、大和地方に京都を加えて実施された後、研究の雰囲気は薄れて、観光ムードへ逆行しているとの批判がだされ、教官の旅行委員会が設置された。ここで旅行全体について再検討した結果、「存続の方向」を確認し、12月、教官会議で基本的な方針が確認された。即ち、

- ① 性格を研究旅行とする
- ② 方向を大和地方とし、3泊4日で行なう
- ③ 時期は2年生1学期、5月下旬とする
- ④ 早期に問題ととり組ませ、指導を徹底する

一方、生徒旅行委員会は、従来2年1学期に設置されていたので、1年のこの時点ではまだ準備されていなかった。先の確認事項が旅行委員会以前に発表され

たことで、生徒は「教官の押しつけ」として反発し、HR討議を経て、生徒の要望をまとめて反対の理由とした。

- ① 規則的な学校生活から解放された楽しい思い出としての旅行にしたい。
- ② 奈良・京都は近いので行く機会が多い。
- ③ 寺院・仏像などにはあまり興味がない。
- ④ 中国・四国地方は行く機会が少ないので、ぜひ行ってみたい。(新幹線が岡山まで開通し距離的に近くなった)

改めて、生徒旅行委員会が学校の方針に沿って3案を作成し、HRでの採決、教官会議の認を経て、47年2月末にコースが決定された。学校の方針に沿って生徒を指導する段階で、生徒の意見とのくい違いが明らかにされたわけだが、結果的にはコースの変更を除いて方針に沿った案となり、しかも、旅行を生徒全体により意欲的にとり組ませることができたと言える。しかし、「今度の旅行では観光旅行と研究旅行の2つが居座っていて、ぼくたち生徒はその2つをうまくやりのけてきたような感じた」(47・7・19発行「進路」73号)といった感想に示されるように、教官旅行委員会での結論から性格的にもかなりはずれるような結果となった。コースの選択によって性格が規定されてくる面もあり、また、コースに多少の変更を加えながら踏襲するうちに初期の意図が薄れて性格的に変わってくる可能性がある。旅行の意義づけを生徒と共に明確におさえた上でコースの選択や変更を行なってゆかねば、再び逆行の恐れもあろう。

(3) 研究旅行の充実

48年度は研究旅行がより充実した形で進められた。準備経過 47年9月高1各クラス旅行委員選出

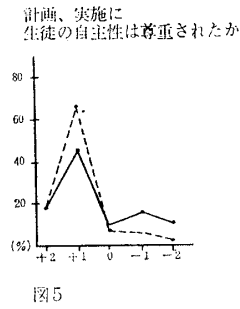
- 11 合同LTで研究旅行オリエンテーション。原則、経過、実施例の説明
- 12 コースについて、クラス討議を経て委員会案作成
実施方針の確認

- ① 旅行の方向を47年度の変形(京都2泊)とする
- ② グループ研究を中心とした旅行とする。(じっくり腰をおちつけてやる)
- ③ グループごとの行動は事前に十分計画を練りそれにもとづく
- ④ 方向を確認して教官会議の承認を得る
- ⑤ 時期その他の細部は学校に一任する

48年1月コース再検討、細部決定

2. 教官会議で承認
3. 研究グループ編成、準備
4. グループ研究計画書作成、提出

これらの準備過程に対して、生徒は自主性を尊重されたと評価している。(図5)



まとめ

高校研究旅行は本年度ルールに乗った感じがするがその中に、少数ながら、集団から離反した意見や行動があり、問題点を浮き彫りにしている。研究テーマに関して「適当に決めた、いいかげんに決めた、行けば

なんとかかなと思った」、研究自体について「研究テーマはやはり飾りにすぎなかった、やはり観光旅行がよい、研究など窮屈だ、北海道・東北・九州など遠くへ行きたい」グループに関して「いやな奴と一緒に楽しめなかった、テーマをおしつけられてやる気がなかった」等の意見がある。その他問題点としては、研究テーマによる小集団のつくり方は、極端に言えば生徒数だけのテーマに分れるので、友人関係とテーマのまとめ方に指導が必要である。また、準備の大半は高1でなされ、高2ではわずか1ヶ月半で実施されるために生じる混乱がある。申し送り、確認事項を明確にしておく必要がある。

修学旅行は、具体的実施の場ではさらに多くの問題をかかえながらも、生徒にとっては非常に楽しい行事であり、今後も試行錯誤を重ねながらより望ましいあり方を求めることが課題である。

Ⅱ 中学校修学旅行

1. 年度別修学旅行一覧表

表3 中学校修学旅行

年度	学年	時期	日数	旅行地
41	3	5月中旬	3泊4日	箱根・東京・軽井沢
42	〃	〃	2泊3日	横浜・東京・軽井沢・長野
43	〃	〃	〃	富士・東京
44	〃	〃	〃	箱根・富士・東京
45	〃	5月下旬	〃	東京・日光・奥日光
46	〃	〃	〃	富士・東京
47	〃	〃	〃	鎌倉・東京・日光・奥日光
48	〃	〃	〃	〃

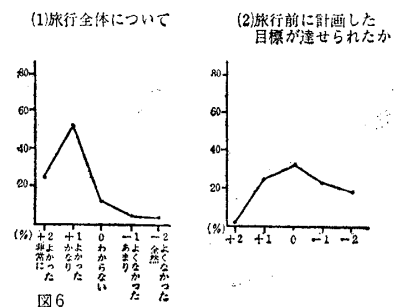
グループ 研 究 テ ー マ	1 鎌倉の地理と歴史
	2 鎌倉の寺院
	3 鎌倉大仏に関する歴史的なこと
	4 鎌倉の社寺を考える
	5 大谷観音
	6 大谷観音について
	7 主として日光の自然について
	8 日光の地形、動植物、自然利用
	9 首都東京の現況
	10 東京の交通発達状況
	11 東京付近の交通網の状態と問題
	12 関東見聞録

2. 48年度実施の概略

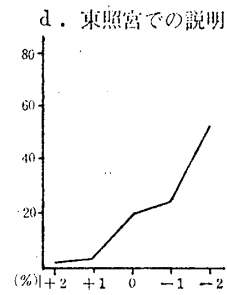
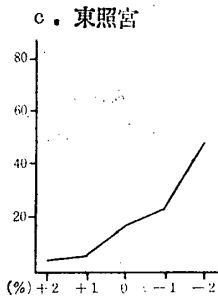
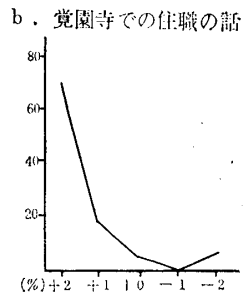
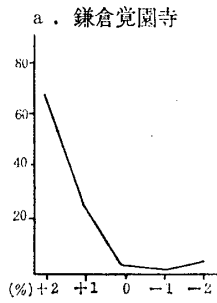
表4

学 年	3年生 2学級 (85名)
時 期	48年5月29日～5月31日 2泊3日
行 程	第1日目＝鎌倉(大仏・八幡宮・覚園寺)－東京 2 大谷観音－日光東照宮－戦場ヶ原－湯元 3 華嚴の滝－東京上野公園(博物館・科学館・美術館)－帰名
費 用	約 11,000

3. 生徒の感想



(3)見学地についての感想



4. 旅行の性格について

中学校では、いわゆる一般的な修学旅行を行なっている。学年全体を1つの集団として団体行動をとるが85名なので、比較的まとまりやすい。中学生の場合は小集団単位の活動には問題が多く、また、生徒自身の強い要求でもない。その中で、与えられた行程を、より積極的・研究的に消化するために、グループ研究の形をとった。グループ内で研究テーマをみつけ、事前の下調べと事後の報告書の作成を行なったが、中学生段階では高校生よりむしろ真剣にとり組ませることが可能で、各見学地で時間不足であった。この意味でコースを精選したり、コースの選択制を取り入れるこのも考えられるとよい。

コースの決定はHRの話し合いにもとずいて、教官旅行委員会でなされるので、毎年生徒の希望によりコースに多少の変更がある。今年度は足尾鋤山を加えることが考えられたが、調査の結果、時間的余裕がないことで見送られた。行程の上では、近年東京に費す時間が縮少されてきている。交通渋滞、宿所の不適、首都見学の意義への疑問等が理由である。生徒の感想の中で最も不評だったのは東照宮であり、商業化した観光地と観光旅行への批判となっている。

中学生の場合も、ベルトコンベア式の見学には反発が大きく、修学旅行そのものの性格や意義づけを検討する必要があるだろう。